

自己客体視理論についての一考察

上田 恵津子

A Study on the Theory of Objective Self-Awareness

UEDA Etsuko

I. はじめに

我々は、自分の姿を鏡に映してみる時や自分が他者に注目されていることに気づいた時、多かれ少なかれ自分自身を意識するようになる。逆に、自分のしていることに熱中している時は、その仕事の内容や出来具合などの方に注意が向いているので自分自身の姿はあまり意識されない。このような自己に対する意識の程度の差が個人の自己評価や社会的行動に異なった影響を及ぼす点に着目して、Duval と Wicklund は自己客体視理論 (theory of objective self-awareness) を提唱した (Duval & Wicklund, 1972; Wicklund, 1975)。

この理論は、主体としての自己と客体としての自己という二分法を基にして、人の注意が客体としての自己に向けられた場合の行動への動機づけのプロセスについて考察している。そして自己客体視理論とそれに基づく研究は、客体としての自己への意識の高まりが self-esteem, 原因の帰属, 社会的促進, 同調性, 態度変容などを規定することを示してきた。

本研究では、こうした各領域における研究の進展という視点ではなく、自己客体視理論の問題点がどのように解決されてきたかという視点から、その後の研究動向と理論の発展を概観することによって、自己を意識することが行動に影響を及ぼすプロセスについて考察する。

II. 自己客体視理論とその問題点

1. 基本的仮説

自己客体視理論の基本的な仮説は、意識的な注意 (conscious attention) には2つの方向がある、というものである。すなわち、意識的な注意は自己に向けられるか、あるいは外部環境に向けられるかのいずれかである。そして、注意の焦点が自己に向けられ、自分の思考、感情、動機、行動のしかた、外観、身体の調子など自己の内的状態を意識している状態、換言すれば自己を意識の中心的な対象として捉えている状態を、自己客体視 (objective self-awareness) の状態と名付けた。これとは逆に、注意の焦点が自己から離れて、自分が知覚したり働きかけたりしている外界に向けられており、自己を行為の主体として把握しているだけの状態を、自己主体視 (subjective self-awareness)¹⁾の状態と名付けた。人はいつもこれら2つの状態のいずれか一方にあり、注意の焦点が自己と外部環境の双方に同時に向けられることはない、とされている。

注意の焦点がどちらの方向に向くかは、外部の刺激によって決定される。Wicklund らによると、対象としての自己を思い起こさせる刺激は自己客体視を促進させ、他のすべての刺激は注意

を外部に向けさせるであろう、とされる。実験室で自己客体視を高めるために使われる刺激としては、鏡、テレビカメラ、録音された被験者自身の声、観察者の存在、などがある。これらの実験操作が操作的に有効で、自己に注意に向けさせる効果があることは、いくつかの研究で確認されている (Davis & Brock, 1975; Geller & Shaver, 1976; Carver & Scheier, 1978)。

2. 自己客体視の結果

このような自己客体視の状態の結果について、Wicklund らは次のように考察している。

1) 自己評価反応

人が自己客体視の状態に導かれると、個人の基準 (standard) すなわち理想の自己像と現実自己との比較によって自己評価 (self-evaluation) が行われる。

現実の自己の状態が基準を下回る場合は、両者の間のネガティブなずれが認識されるため、ネガティブな感情が生じ、self-esteem の低下、内罰などの自己批判を招く。

例えば、Ickes, Wicklund, & Ferris (1973, 実験II) は、被験者に自己評価の質問紙(20個の形容詞対について20点尺度で評定するもの)を実施し、1枚には現実の自己を、もう1枚には理想の自己を評価するよう求めた。そして、どちらか一方に答えている間、あらかじめ録音しておいた被験者自身の声を聞かせる(自己客体視が高い条件)、他の学生のを聞かせる(自己客体視が低い条件)、テープを全く聞かせない(統制条件)、の3条件を設けた。その結果、評定項目を配列順に5項目ずつに分けて、現実自己と理想自己のずれを自己客体視が高い条件と低い条件で比較してみると、Fig. 1 のように、最初の5項目については、自己客体視が高い条件の方が低い条件よりも現実自己と理想自己のずれが大きかった。そして、理想自己はいつもあまり変化しないから、このずれは実際には現実自己の評定が低くなったために生じたものであることも示された。これらのことから、自分の声を聞くことによって自己に注意が向けられると、自分の欠点に気づきやすくなるために、不快感、self-esteem の低下が生じること、そして自己客体視の操作が self-esteem に及ぼす影響はそれが導入された時に最大であることが示唆された。

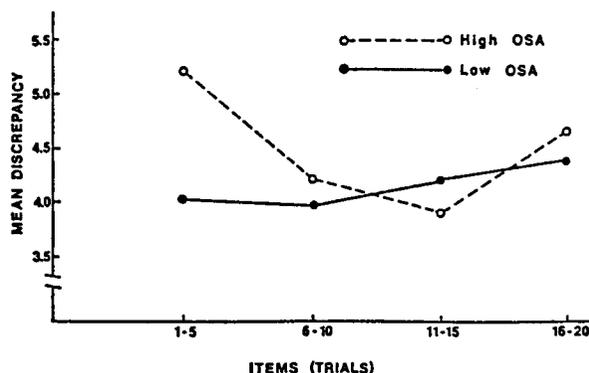


Fig. 1 自己客体視 (OSA) が現実自己と理想自己の評価のずれに及ぼす効果 (Ickes, Wicklund, & Ferris, 1973, 実験II)

また、Duval & Wicklund (1973, 実験II) は、鏡によって自己客体視を高められた条件では、そうでない条件よりも、ネガティブな結果に対する責任を自己に帰属しやすいことを見出した。一方、現実の自己の状態が基準と合致あるいは上回っていれば (時間的に近接した成功経験が

ある場合など)、両者の間のずれはポジティブなものとなり、その結果、自己に向けられた注意はポジティブな感情を引き起こし、self-esteemの高揚や自己拡張感を伴うであろう(Ickes et al., 1973, 実験III; Duval & Wicklund, 1973, 実験II)。

しかしながら、このようなポジティブな状態は要求水準の上昇により長くは続かないため、ほとんどのすべての自然に生じるずれはネガティブである、とWicklund(1975)は主張している。

2) 行動への動機づけ

自己評価反応に続いて起こる反応は、(a)ずれがポジティブならば自己客体視の状態への接近反応を示し、ずれがネガティブであればそれを意識させている自己客体視の状態を回避しようとする、(b)ずれがネガティブで自己客体視の回避が不可能な場合は、現実の自己を基準と一致する方向に変えることで、意識化されたネガティブなずれを低減しようとする、のいずれかであると仮定される。

(a) 自己客体視の回避

自己客体視の状態を回避するための方法としては、鏡やテレビカメラなどの自己客体視を引き起こす刺激からの身体的回避、音楽を聴くなど他の刺激を求めて注意を自己からそらすという試み、が挙げられる。

Duval, Wicklund, & Fine (1972) では、被験者に創造性と知能についてフィードバック(ポジティブ・ネガティブ)した後に、部屋(鏡がある部屋・ない部屋)に入ってもらい、被験者が部屋から出てくるまでの時間を測定した。その結果、ネガティブフィードバック(ネガティブなずれが大きい)条件では鏡の回避の効果が顕著であった。

Gibbons & Wicklund (1976)においても、ネガティブなフィードバックを受けた被験者は自己客体視を引き起こす刺激(自分の声)を回避しようとする傾向が強いことが示されている。

Davis & Brock(1975)では、被験者は創造性テストでポジティブあるいはネガティブなフィードバックを与えられた後、自己客体視の操作を受けながら、外国語で書かれた文章を読んで下線が引かれている代名詞に対応する英語の代名詞を選択するという課題を行った。自己客体視の操作は、実験Iではテレビカメラ、実験IIでは鏡が用いられた。その結果、自己客体視が高められた状態ではネガティブフィードバック条件の方が一人称代名詞の使用が少なかった。これは、ネガティブなフィードバックを受けて自己客体視を高められた被験者は、自己に関連する記述すなわち一人称代名詞の使用を少なくすることによって自己客体視の状態を回避しようとしたと考えられた。

また、Liebling, Seiler, & Shaver (1974) は、鏡によって自己客体視が高められた時には喫煙反応が増すことを示している。

(b) ずれの低減

ところが、このような自己客体視の回避が不可能である場合には、人は現実の自己の状態と基準との間のネガティブなずれを低減するよう動機づけられる。多くの場合、ずれの低減は自分の行動や態度を基準と一致させようとする方向に向かうものと考えられる。

Scheier, Fenigstein, & Buss (1974) では、被験者が教師となって学習者(サクラ)に学習実験を行い、正答に対しては点燈して報酬を与え、誤答に対しては罰として電気ショックを与えるよう求めた。電気ショックの強さは被験者が選択することができた。被験者がこのような課題を行

うにあたって自己客体視が操作された。その結果、実験Ⅰでは鏡で自分の姿を見ることにより、実験Ⅱでは観察者と頻繁に視線を交わすことにより自己客体視を高められた被験者は、そうでない被験者よりも、学習者に与えた電気ショックが弱かった。すなわち、自己客体視が高められると、自分が電気ショックを与えていることをより強く意識するようになり、学習者に与える電気ショックを弱くすることによってずれを低減しようとしたのである。

一方、Carver(1974)は、Scheier et al. (1974)と同様のパラダイムを用いたが、強い電気ショックが学習を促進するという教示を与えた。すると、鏡で自分の姿を見た被験者は、そうでない者よりも強い電気ショックを与えた。ここでは電気ショックを与えることが適切な基準とみなされ、その基準に一致するより強い電気ショックが与えられたと考えられる。

また、Wicklund & Duval (1971, 実験Ⅲ)は、ドイツ語の散文の複写を行う課題において、制限時間内でできるだけ多く複写するよう求めると、鏡によって自己客体視を高められた場合はそうでない場合よりも複写量が增大することを見出している。

3. 問題点

以上のように、自己客体視理論は「自己客体視→自己評価→行動への動機づけ」というプロセスで個人の社会的行動を説明しようとするものである。しかし、主要な問題点として、1)個人の性格特性としての自己客体視については扱われていない、2)自己客体視の状態は常に嫌悪的で、ネガティブな動因状態が喚起されるという仮説は支持されない、3)自己客体視を高めるために用いられる実験的操作は、それぞれが喚起する内容・次元が異なると考えられるが、その区別がなされていない、従って操作によって注意が自己のどの側面、どの認知要素に焦点づけられるのが不明瞭である、の3点を挙げることができよう。

III. 自己客体視の個人差

Duval と Wicklund が個人の様々な社会的行動を規定する先行条件として取り上げた自己客体視とは、鏡やテレビカメラなどの実験的操作によって作り出されたその時々意識の状態を表現するものであって、個人特性を表わすものではない。しかし、自己客体視の高まりを生起させる要因はこれらの実験的操作だけでなく、各個人の性格特性も考慮に入れなければならないと思われる。

1. 自己意識尺度

Fenigstein, Scheier, & Buss(1975)は、個人の性格特性としての自己客体視を考え、自己意識 (self-consciousness) と名付けた²⁾。そして自己に注意を向ける程度の個人差の測定法として自己意識尺度を考案した。この尺度は、私的自己意識 (private self-consciousness)、公的自己意識 (public self-consciousness)、社会的不安 (social anxiety) の3下位尺度から成る。私的自己意識とは、自己の感情や気分、動機など、自己の内的側面に注意を向ける程度に関する個人差、公的自己意識とは、社会的対象としての自己、換言すれば自己の外観や他者に対する言動などの自己の外的側面に注意を向ける程度に関する個人差、社会的不安とは、他者の存在によって不安感を抱く程度に関する個人差を示すものと考えられた。しかし、私的自己意識と公的自己意識が、自己に注意が向けられた時に惹起されるプロセスに関するものであるのに対して、社会的不安は、そのプロセスに対する反応に関するものと解釈され、前二者とはやや意味の異なるものと

考えられている。

これら3つの下位尺度の間には若干の相関がみられたが、Fenigstein et al. (1975) は各々を独立したものとみなしてさしつかえないという見解を示している。

各下位尺度の妥当性はいくつかの研究で確認されている (Carver & Glass, 1976; Turner, Scheier, Carver, & Ickes, 1978; Carver & Scheier, 1978)。

2. 自己意識が行動に及ぼす影響

このような自己意識のあり方が行動を規定する要因であることは様々な研究で支持されている。特に、私的自己意識の高い人と公的自己意識の高い人はそれぞれ特徴的な行動様式を示すことが見出されている。

例えば、私的自己意識の高い人は低い人に比べて、その時々自分の意見・態度を自覚しているため態度と行動の間の一貫性が高い (Scheier, Buss, & Buss, 1978) こと、自己についての知識が高度に構造化されているから、自己に関連した情報 (特性語) に対してアクセスしやすい (Turner, 1978, 1980; Hull & Levy, 1979, 実験 I; Mueller, 1982) こと、などが報告されている。

一方、公的自己意識の高い人は低い人に比べて、社会的相互作用場面において他者からの評価に対して敏感であり (Fenigstein, 1979, 実験 I), ネガティブな準拠集団を意識しやすい (Carver & Humphries, 1981), などの結果が得られている。

ところで、これらの研究では、私的自己意識と公的自己意識のいずれか一方だけがそれぞれの行動に影響を及ぼし、他方は関係しないことが示されてきた。しかし、これは自己の私的側面・公的側面のいずれか一方だけが関与するような行動状況であったためと思われる。そこで、自己の両側面が行動に影響を及ぼすことが予期されるような状況において、私的自己意識と公的自己意識が逆の効果をもつことを示唆した研究に次のようなものがある。

Scheier (1980) は、罰の使用に対して賛成あるいは反対の態度をもつ被験者に対して、自分の態度についてエッセイを書かせた。その際、被験者は、エッセイを書いた後で他者とその問題について討論することを予期させられる (実際には討論は行われない) が、その相手が自分とは逆の態度をもつという情報を与えられる群と、相手の態度についての情報を与えられない群を設けた。その結果、情報の有無に関係なく、公的自己意識の高い人は低い人に比べて、予備調査時に示していた態度より緩和した態度をエッセイで述べ、態度の一貫性は低かった。つまり、他者との討論を予期することにより、他者からの評価・印象を意識して自己の態度の表出を調節するため、

Table 1 私的自己意識と公的自己意識の高・低各群における、予備調査時の態度とエッセイで表出された態度の相関 (Scheier, 1980)

Dispositional tendency	High public	Low public
High private	.12	.68*
n	24	24
Low private	.00	.27
n	26	39

* $p < .01$.

態度変容が起こったのである。一方、私的自己意識が高く公的自己意識の低い人は、自分の意見・態度をよく自覚しているから時・状況を越えて態度の安定性は高く、しかも自己表出が調節されることがないから、態度の一貫性は高かった (Table 1)。

また、Froming & Carver (1981) は、私的自己意識と同調行動との間に負の相関を見出し、公的自己意識と同調行動との間

には、正答と多数派の回答とのずれが大きい場合に正の相関を得た。

Carver & Scheier (1981b) では、威圧的な対人的コミュニケーションのような社会的状況での抵抗について、私的自己意識は抵抗反応を増大させるが、公的自己意識は抑制することが示唆されている。

以上のように、自己意識は行動を規定する要因であり、特に私的自己意識と公的自己意識の差異は行動の予測において重要であるといえる。

IV. 自己客体視のサイバネティックモデル

Carver と Scheier は、自己客体視が行動に影響を及ぼすプロセスについて、制御理論のプロセスにより考察したモデルを提出し、Wicklund らの自己客体視理論を修正している (Carver, 1979; Carver & Scheier, 1981a)。彼らは、自らの仮説を検証するために行われた実験の結果と、Wicklund らの理論に基づいて行われた他の研究結果とをうまく統合して、自己客体視が自己調整 (self-regulation) を媒介するプロセスについて述べている。その概略を Wicklund らの理論との相違に着目しながら示すと次のようになる。(2. 以下のプロセスは Fig. 2 参照)

1. 注意が自己に向けられた時、行動の基準が喚起されていなければ、自己客体視は単に自己の salient な認知要素の意識を高めるだけである。この場合、自己客体視は評価的でなく、嫌悪的な状態ではない。

この仮説は、自己客体視が自己批判的な評価に導くとした Wicklund らの主張とは異なる。Carver らはこの仮説を支持する根拠として、自己客体視は自己への帰属を増大させる (Duval & Wicklund, 1973; Buss & Scheier, 1976)、情動体験を強める (Scheier, 1976; Scheier & Carver, 1977)、態度と行動の間の一貫性を高める (Scheier et al., 1978)、文章完成課題で自己に関連した反応を多く生じさせる (Carver & Scheier, 1978)、などの知見を挙げている。

2. 行動の基準が喚起されている時、自己客体視は自己の現在の状態と基準との比較を行わせる。そしてポジティブな基準との比較によりネガティブなずれが生じれば、ずれの低減・基準との一致へと向かわせる。

まず、自己客体視が現在の状態と salient な基準との比較に導くことは、Scheier & Carver (1983b) の実験で確かめられている。

次に、自己客体視がずれを低減するために行動を salient な基準に一致させるように導くという仮説は、Wicklund らの理論においても主張され、前述のようにいくつかの研究により支持されている。

しかし、このプロセスの推論は両者でかなり異なっている。Wicklund らは、ずれが存在する時は自己客体視は常に嫌悪的でネガティブな動因状態が喚起されると仮定し、そうした自己客体視の嫌悪が行動変容を起こすとした。これに対して、Carver らはこのプロセスを制御理論により次のように解釈する。行動の基準が salient である時の自己客体視は、TOTE 単位の「テスト」すなわち現在の状態と基準との比較によりずれが存在するかどうかを評価することを表わす。そして自己客体視に対する行動的反応、すなわち行動を基準の方向へ変えることが「操作」である。「操作」は「テスト」がずれを示すまで行われないから、TOTE 単位の連鎖が生じるためには、ずれに注意を焦点づけることが必要である。従って、自己客体視によるずれの意識が行動

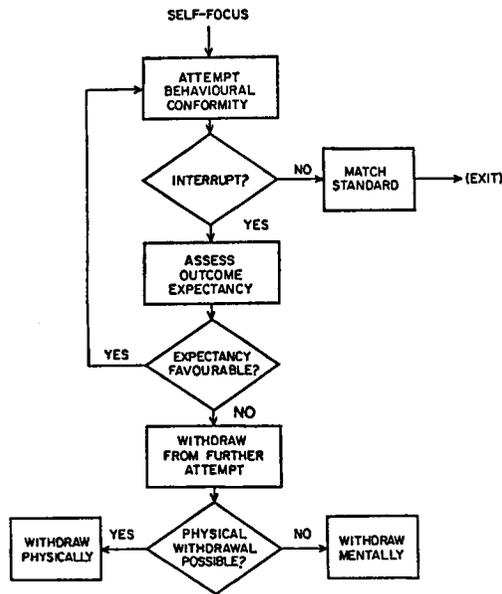


Fig. 2 自己客体視のサイバネティックスモデル
(Carver, 1979 ; Carver & Scheier, 1981a)

変容を起こすと考えた。

3. 基準との一致に向かうプロセスが中断しなければ、行動と基準の一致が成立する。このプロセスが中断されると、結果の期待すなわち目標に到達できる可能性を評価する過程が喚起される。

4. 結果の期待がポジティブであれば、ポジティブな感情が生じ、行動を基準に一致させる試みに戻る。結果の期待がネガティブであれば、ネガティブな感情が生じ、回避反応が起こる。その場合、自己客体視を高めて基準を salient にする状況から身体的に回避するか精神的に回避するかのいずれかの形をとる。

まず感情については、Wicklund らの理論では、自己客体視の状態は常にネガティブな感情を伴うとされていた。しかし、Wicklund らがその根拠として引用した研究 (Duval et al., 1972 など)は、ずれが存在して被験者がそれを低減することができないという状況であった。

これに対して、Steenbarger & Aderman (1979)は、Duval et al. (1972)の方法を修正したパラダイムを用いて、自己客体視がネガティブな感情を増大させるのはずれを低減できないことが予期される時だけで、ずれを低減できると予期される時にはその傾向はみられないことを見出している。この他にも、自己客体視がネガティブな感情を伴うとはいえないとする研究は多い (Davis & Brock, 1975; Carver & Scheier, 1978; Hull & Levy, 1979, 実験Ⅱなど)。これらの知見を基に、Carver らは、自己客体視によりどのような感情が生じるかは期待の方向によるのであって、ネガティブな感情が生じるのは自分の現在の状態を基準の方向に変えることができないと知覚される時だけであると仮定する。

次に、接近一回避反応についての仮説は以下のような研究により支持される。

身体的な接近一回避反応については、例えば Steenbarger & Aderman (1979) は、ずれを低

減できないことが予期される場合、自己客体視は回避を早めるが、ずれを低減できると予期される場合は自己客体視による回避の促進はみられないという結果を得ている。

また、Carver, Blaney, & Scheier (1979a)は、ヘビに対する恐怖は中程度であるがヘビをつかむことができるという期待度が異なる(自信あり・なし)被験者に対して、鏡がある条件あるいはない条件において、ヘビに近づいてそれをつかむよう求めた。その結果、自己客体視は自信のない被験者に早く回避させることが示された。

Carver, Blaney, & Scheier (1979b)では、第1課題で失敗経験を与えることによって被験者にずれを生じさせた後、第2課題に対する期待(ポジティブ・ネガティブ)を操作した。そして第2課題(解決不可能)を鏡がある条件あるいはない条件で行い、その持続性(persistence)を測定した。その結果、自己客体視は、ポジティブな期待群の persistence を高め、ネガティブな期待群のそれを低めることが見出された。

一方、身体的な回避が不可能な場合は、自己客体視の状態からの精神的な回避反応が起こる。これは、目標に関連する情報を無視することによって遂行成績の低下に反映される。

例えば、Carver & Scheier (1982)では、迷路課題で3試行連続の成功あるいは失敗を経験させることによって期待を操作した後、鏡がある条件あるいはない条件で4試行目を行った。その結果、4試行目の遂行成績は、自己客体視が高められた状態では成功群の方が失敗群よりも良かった。つまり、成功群は期待がポジティブであるから達成基準への一致に向かって努力するが、失敗群は期待がネガティブであるため、精神的な回避により遂行成績が低下したものと考えられる。

また、Brockner (1979)は、第1課題で失敗後、自己客体視が高められると(鏡がある場合と私的自己意識が高い場合)、self-esteem の低い人の第2課題の遂行成績は self-esteem の高い人より悪いが、成功後は自己客体視が高められても self-esteem の高・低による差は生じないという結果を得た。この実験では期待の操作はされなかったが、失敗条件では self-esteem の低い人は高い人より期待が低く、成功条件では両者の期待に差がなかったことから、得られた遂行成績の差は期待の差によることが示唆された。

ところで、基準との一致に向かう反応と回避反応のどちらが優位であるかという問題について、Wicklund らと Carver らは逆の仮説を立てている。つまり、Wicklund (1975)は自己客体視を回避できない場合にのみずれの低減の試みが起こると考えたのに対し、Carver らは、基準との一致に向かう反応が優位であり、基準との一致に対する期待がネガティブな時のみ回避が起こるとしている。

McDonald (1980)の実験において、第1課題(創造性)でネガティブなフィードバックを受けて鏡によって自己客体視が高められた(すなわちネガティブなずれが salient になった)被験者は、第2課題の persistence が高かった。そしてこの効果は、第2課題が創造性に関係するものであると教示された場合に特に見出された。この実験では、被験者が自ら終了を告げれば簡単に自己客体視を回避することができたため、persistence の増大を、自己客体視の状態を回避するために自己から注意をそらして課題に没頭していた結果と考えることはできない。また、Carver et al. (1979b)の結果の解釈においても、persistence の増大が回避を表わすという可能性は同様の理由により否定される。これらの研究は、ずれを低減させる手段が有効であれば、ずれの低

減・基準との一致へ向かう反応が優位であることを示唆したものとえよう。

以上が Carver らの提出したモデルの概略である。このモデルは、Wicklund らの理論における、自己客体視は常に嫌悪的でネガティブな動因状態が喚起されるという仮説のもつ問題点を解決する上で、非常に有効な示唆を与えるものと思われる。

V. 私的自己と公的自己

自己客体視を高めるための実験的操作が喚起するものの差異の可能性については、Buss (1980) の理論が示唆を与えている。彼は、Wicklund らの理論を基本的には踏襲しながらも、独自の理論を展開している。

Buss は、自己を私的自己 (private self) と公的自己 (public self) に分けて考える。私的自己とは、自己の感情や気分、動機、身体の調子、自己評価など、他者からは直接観察されない自己であり、自省した時や日記をつける時、空想や瞑想にふける時、小さな鏡を見た時（顔だけ映る程度の鏡は自己の外観よりも自己の内面に注意を向けさせる）などに意識されるだろうと考えられている。一方、公的自己とは、自己の外観や他者に対する言動など、他者から観察されうる自己である。これは、他者に見られている時、他者に避けられた時、カメラを向けられた時、テレビカメラやマイクを向けられた時などに意識され、公的自己の中でも特に外観的な部分は、三面鏡のような大きな鏡で全身を見た時、自分の写真を見た時、ビデオテープに録画された自分の姿を見た時、テープに録音された自分の声を聞いた時などに意識されるという。そして、状況変数により操作される自己客体視を、私的自己への意識を高める private self-awareness と公的自己への意識を高める public self-awareness に分類し、両者がそれぞれ行動に異なった形で影響を及ぼすことを考察している。

Froming, Walker, & Lopyan (1982) は、このような実験的操作の私的—公的の差異という問題について検討している。実験 I では、自分は罰の使用に対して反対であるが大抵の他者は賛成意見をもつと考えている人を被験者にし、Scheier et al. (1974) の実験と同様の偽の学習実験の課題を行わせた。その際、小さな鏡 (12×12 インチ) がある条件、被験者を評価する他者がいる条件、被験者を評価しない他者がいる条件、および統制条件を設けた。その結果、各実験条件の電気ショックの強さを統制条件と比較すると、鏡条件は弱く、評価する他者条件は強く、評価しない他者条件とは差がなかった。これは、鏡の存在は私的自己に注意を向けさせるために自分の態度をより salient にするが、評価する他者の存在は公的自己に注意を向けさせるために大抵の他者がもっている態度を salient にし、それに一致させるようになるのだと考えられた。実験 II では、実験 I と全く逆の考えをもつ（すなわち自分は罰の使用に対して賛成であるが大抵の他者は反対であると考え）被験者を用いて、鏡の存在は電気ショックを強め、評価する他者の存在はそれを弱めるという結果を得ている。これらの結果から、Froming らは、鏡の存在は私的自己に注意を向けさせるので行動は個人の基準により導かれるが、評価する他者の存在は公的自己に注意を向けさせるので行動は社会的基準に基づくことを検証した。

また、Scheier & Carver (1980) は、被験者に自分とは逆の態度のエッセイを書かせて同調を誘導するパラダイムを用いて、自己に向けられた注意が態度変容と不協和低減に及ぼす影響について検討した。その結果、鏡は態度変容を抑制し、エッセイの態度に対する知覚を変えること

によって不協和を低減するよう導くのに対して、テレビカメラは態度変容を促進し、態度の変容によって不協和を低減させること(実験Ⅱ)、私的自己意識が高く公的自己意識の低い人は実験Ⅱの鏡条件と、公的自己意識が高く私的自己意識の低い人は実験Ⅱのテレビカメラ条件と、それぞれ同様の結果を示すこと(実験Ⅲ)を見出し、鏡は私的自己に、テレビカメラは公的自己に、それぞれ注意を向けさせることを示唆している。

これらの研究は実験的操作の差異を直接比較して検証したものであるが、ここで得られた結果と単一の実験操作を用いて行われた従来の研究結果との一致をみたことから、その妥当性は評価できると考えられる。従って、自己客体視を高めるための実験的操作が自己のどの側面に注意を向けさせて行動にどのような影響を及ぼすかは、用いる刺激によって異なるといえよう。

更に、Buss(1980)の理論では、private self-awareness と私的自己意識、public self-awareness と公的自己意識がそれぞれ行動に同様の効果をもつと仮定される。特に、小さな鏡によって private self-awareness を高められた人と私的自己意識の高い人が同様の行動様式を示すことは、これまで数多くの研究で認められている(Scheier & Carver, 1977; Carver & Scheier, 1978, 実験Ⅰ; Scheier, Carver, & Gibbons, 1979; Scheier & Carver, 1980 など)。

しかしながら、私的自己への注意と公的自己への注意がいつも行動に逆の影響を及ぼすとはいえないし、Bussの理論に反して、両者が類似した影響を及ぼすような行動状況も数多く報告されているのである(Scheier et al., 1974; Fenigstein, 1979; Carver & Scheier, 1981c; Stephenson & Wicklund, 1983 など)。

結局、Scheier & Carver (1983a) が指摘するように、私的自己と公的自己の差異が行動の予測において常に重要であるとはいえないが、人が逆の行動様式を示す時には、両者の差異はかなり重要なものになってくると思われる。

サイバネティックモデルの立場からいえば、目標とする状態が私的自己の関与によるところが大きいものであれば、私的自己が基準となって行動に影響を及ぼすであろうし、公的自己の関与によるところが大きいものであれば、公的自己が行動の基準になるであろう。

VI. 残された問題と今後の展望

以上概観してきたように、自己客体視理論は、当初の理論構築と用いられる実験手法の問題点が次第に解決され、発展してきた。しかし、未解決な問題も残されている。

第1に、この理論は注意の方向性を基本概念にしているが、注意の方向・量・時間を直接測定することはきわめて困難であるという点である。従って実験操作が正しく働いたかどうかを直接確認することも困難である。この点については、ほとんどの研究は、実験後に実験操作のチェックの質問紙を実施して、被験者が自己に注意を向けていた程度を測定する方法で補っている。また自己意識尺度の使用もこのような操作のあいまいさを補う上で有効であると思われる。

第2に、実験状況で注意が自己に向けられる時、どの基準が salient になるのか、そしてそれを決定するものは何か、という問題をより明確にすることは今後の課題といえよう。

第3に、自己客体視を考える際には文化的枠組みの問題も非常に重要であると思われる。日本人に特徴的といわれる対人恐怖症、赤面恐怖症、恥の文化などの問題を自己客体視との関係から論じることも必要であろう。Buss (1980) は公的自己への意識の高まりと社会的不安との関連を

示唆しているが、菅原(1984)においても、公的自己意識が対人不安意識と自己顕示性の両者との間に正の相関をもつことが見出されている。こうした問題を含めて、いわゆる「あがる」という現象の研究が、自己客体視理論の日常生活への適用の可能性の1つとして示唆されよう。

今後は、以上のような問題点を明らかにして、これらを含む総合的な自己客体視のモデルを構築していく必要があると思われる。

注

- 1) この表現の妥当性は問題であり、その後の研究では“objective—subjective”の対比は用いられず、“自己客体視が高い—低い”、“self-focus—environment-focus”などが用いられている。
- 2) 注意が自己に向けられている状態は self-focus, self-attention として総称され、その中で鏡やテレビカメラなどの状況変数によって操作されるものを (objective) self-awareness, 人格特性を self-consciousness と呼んで区別している。

引用文献

- Brockner, J. 1979 The effects of self-esteem, success-failure, and self-consciousness on task performance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 1732-1741.
- Buss, A. H. 1980 *Self-consciousness and social anxiety*. San Francisco: Freeman.
- Buss, D. M., & Scheier, M. F. 1976 Self-consciousness, self-awareness, and self-attribution. *Journal of Research in Personality*, 10, 463-468.
- Carver, C. S. 1974 Facilitation of physical aggression through objective self-awareness. *Journal of Experimental Social Psychology*, 10, 365-370.
- Carver, C. S. 1979 A cybernetic model of self-attention processes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 1251-1281.
- Carver, C. S., & Glass, D. C. 1976 The self-consciousness scale: A discriminant validity study. *Journal of Personality Assessment*, 40, 169-172.
- Carver, C. S., & Humphries, C. 1981 Havana daydreaming: A study of self-consciousness and the negative reference group among cuban americans. *Journal of Personality and Social Psychology*, 40, 545-552.
- Carver, C. S., & Scheier, M. F. 1978 Self-focusing effects of dispositional self-consciousness, mirror presence, and audience presence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 324-332.
- Carver, C. S., & Scheier, M. F. 1981a *Attention and self-regulation: A control-theory approach to human behavior*. New York: Springer-Verlag.
- Carver, C. S., & Scheier, M. F. 1981b Self-consciousness and reactance. *Journal of Research in Personality*, 15, 16-29.
- Carver, C. S., & Scheier, M. F. 1981c The self-attention-induced feedback loop and social facilitation. *Journal of Experimental Social Psychology*, 17, 545-568.
- Carver, C. S., & Scheier, M. F. 1982 Outcome expectancy, locus of attribution for expectancy, and self-directed attention as determinants of evaluations and performance. *Journal of Experimental Social Psychology*, 18, 184-200.
- Carver, C. S., Blaney, P. H., & Scheier, M. F. 1979a Focus of attention, chronic expectancy, and responses to a feared stimulus. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 1186-1195.
- Carver, C. S., Blaney, P. H., & Scheier, M. F. 1979b Reassertion and giving up: The interactive role of self-directed attention and outcome expectancy. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 1859-1870.
- Davis, D., & Brock, T. C. 1975 Use of first person pronouns as a function of increased objective

- self-awareness and performance feedback. *Journal of Experimental Social Psychology*, **11**, 381-388.
- Duval, S., & Wicklund, R. A. 1972 *A theory of objective self-awareness*. New York: Academic Press.
- Duval, S., & Wicklund, R. A. 1973 Effects of objective self-awareness on attribution of causality. *Journal of Experimental Social Psychology*, **9**, 17-31.
- Duval, S., Wicklund, R. A., & Fine, R. L. 1972 Avoidance of objective self-awareness under conditions of high and low intra-self discrepancy. In S. Duval & R. A. Wicklund, *A theory of objective self-awareness*. New York: Academic Press.
- Fenigstein, A. 1979 Self-consciousness, self-attention, and social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 75-86.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. 1975 Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 522-527.
- Froming, W. J., & Carver, C. S. 1981 Divergent influences of private and public self-consciousness in a compliance paradigm. *Journal of Research in Personality*, **15**, 159-171.
- Froming, W. J., Walker, G. R., & Lopyan, K. J. 1982 Public and private self-awareness: When personal attitudes conflict with societal expectations. *Journal of Experimental Social Psychology*, **18**, 476-487.
- Geller, V., & Shaver, P. 1976 Cognitive consequences of self-awareness. *Journal of Experimental Social Psychology*, **12**, 99-108.
- Gibbons, F. X., & Wicklund, R. A. 1976 Selective exposure to self. *Journal of Research in Personality*, **10**, 98-106.
- Hull, J. G., & Levy, A. S. 1979 The organizational functions of the self: An alternative to the Duval and Wicklund model of self-awareness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 756-768.
- Ickes, W. J., Wicklund, R. A., & Ferris, C. B. 1973 Objective self-awareness and self-esteem. *Journal of Experimental Social Psychology*, **9**, 202-219.
- Liebling, B. A., Seiler, M., & Shaver, P. 1974 Self-awareness and cigarette-smoking behavior. *Journal of Experimental Social Psychology*, **10**, 325-332.
- McDonald, P. J. 1980 Reactions to objective self-awareness. *Journal of Research in Personality*, **14**, 250-260.
- Mueller, J. H. 1982 Self-awareness and access to material rated as self-descriptive or nondescriptive. *Bulletin of the Psychonomic Society*, **19**, 323-326.
- Scheier, M. F. 1976 Self-awareness, self-consciousness, and angry aggression. *Journal of Personality*, **44**, 627-644.
- Scheier, M. F. 1980 Effects of public and private self-consciousness on the public expression of personal beliefs. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 514-521.
- Scheier, M. F., & Carver, C. S. 1977 Self-focused attention and the experience of emotion: Attraction, repulsion, elation, and depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, **35**, 625-636.
- Scheier, M. F., & Carver, C. S. 1980 Private and public self-attention, resistance to change, and dissonance reduction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 390-405.
- Scheier, M. F., & Carver, C. S. 1983a Two sides of the self: One for you and one for me. In J. Suls & A. G. Greenwald (Eds.), *Psychological perspectives on the self*. Vol. 2. Hillsdale, N. J.: Erlbaum.
- Scheier, M. F., & Carver, C. S. 1983b Self-directed attention and the comparison of self with standards. *Journal of Experimental Social Psychology*, **19**, 205-222.
- Scheier, M. F., Buss, A. H., & Buss, D. M. 1978 Self-consciousness, self-report of aggressiveness, and aggression. *Journal of Research in Personality*, **12**, 133-140.

- Scheier, M.F., Carver, C.S., & Gibbons, F.X. 1979 Self-directed attention, awareness of bodily states, and suggestibility. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 1576-1588.
- Scheier, M.F., Fenigstein, A., & Buss, A.H. 1974 Self-awareness and physical aggression. *Journal of Experimental Social Psychology*, 10, 264-273.
- Steenbarger, B.N., & Aderman, D. 1979 Objective self-awareness as a nonaversive state: Effect of anticipating discrepancy reduction. *Journal of Personality*, 47, 330-339.
- Stephenson, B., & Wicklund, R.A. 1983 Self-directed attention and taking the other's perspective. *Journal of Experimental Social Psychology*, 19, 58-77.
- 菅原健介 1984 自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, 55, 184-188.
- Turner, R.G. 1978 Self-consciousness and speed of processing of self-relevant information. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 4, 456-460.
- Turner, R.G. 1980 Self-consciousness and memory of trait terms. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 6, 273-277.
- Turner, R.G., Scheier, M.F., Carver, C.S., & Ickes, W. 1978 Correlates of self-consciousness. *Journal of Personality Assessment*, 42, 285-289.
- Wicklund, R.A. 1975 Objective self-awareness. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 8. New York: Academic Press.
- Wicklund, R.A., & Duval, S. 1971 Opinion change and performance facilitation as a result of objective self-awareness. *Journal of Experimental Social Psychology*, 7, 319-342.

(博士後期課程)